

令和7年度 旭学園校内研究・研修について

1 学校教育目標・旭学園ミッション

【学校教育目標】 「夢をもち 未来をひらく 旭っ子」の育成

【達成したいミッション】

地域と共に「グローバル社会・ソサイエティ5.0 時代をたくましく生きる力」と
「ふるさと旭の発展を主体的に考え行動する力」を育む

2 研究主題

ふるさと旭を愛し、地域と共にグローバルな未来を創造する児童生徒の育成
～思考力・判断力・表現力等を育成する主体的・対話的な授業づくりを通して～

3 主題設定の理由

(1) 地域の実態

本校がある美咲町旭地域は、岡山県のほぼ中央に位置しており、豊かな自然に恵まれ、その特徴を生かした産業が多数存在している。地域の人材や企業・団体は、学校教育への関心・理解が高く、郷土学習や放課後事業等での協力が得られやすい環境となっている。また、地域学校協働活動が活発で、学校協働ボランティアなど、地域住民が学校の教育活動に参加する機会が多く、地域全体で子供達の成長を見守っていこうという思いの強い地域である。

(2) 児童生徒の実態

本校の児童生徒の多くは、素直で前向きであり、学習や生活の課題にも粘り強く取り組もうとする。その一方で、旭地域には保育園が一園、義務教育学校が一校となっており、旭地域で育つ子供達は、保育園から旭学園卒業までの約15年間を同じ学級で過ごす。お互いのことをより理解している一方で、少人数であるため、学習や生活の中で多様な見方、考え方に会う機会が少ないという実態がある。また、人間関係が固定化しやすく、自分の考えを表明したり、他者と話し合い協力して課題を解決したりすることに自信が持てない児童生徒が少なくない。さらに、旭地域には高校がないため、高校進学時には、他地域に出て行くこととなるため、今までとは全く違った新しい環境になることに不安を抱えている生徒や保護者も少なくない。

旭地域の人口は2032人(2025年1月末現在)であり、65歳以上の高齢者の割合が約50%という超高齢社会(※1)となっている。美咲町の予想では、今後も人口の減少が予想され、旭地域の人口は、25年後には現在の約半数になるという予想になっている。児童生徒数も年々減少し、令和7年度の児童生徒数は、約90名となる見込みである。

(3) 旭学園の教育

旭小学校・旭中学校は児童生徒の減少を受け、地域住民の強い要望により、令和5年4月に統合し、義務教育学校「旭学園」として開校した。義務教育学校設立に伴い、これまでの「小学校」「中学校」とは違う、9年間で子供達の成長を支援する学校となる。4-3-2年制の学年区分(1~4年を前期ステージ、5~7年を中期ステージ、8・9年を後期ステージ)で教育活動を行い、4年生、7年生、9年生のリーダー育成、中期ステージ以降での教科担任制など発達段階に応じた教育の実践を目指している。

旭学園のミッションとして「地域と共に『グローバル社会・ソサイエティ5.0 時代をたくましく生きる力』と『ふるさと旭の発展を主体的に考え行動する力』を育む」を掲げ、特色ある教育として、郷土学習と英語教育の充実に取り組んでいる。しかし、教職員の多くは、小学校か中学校のどちらかの学校種のための勤務経験しかないため、互いの培ってきた学校文化に大きな違いがある。だからこそ、日々の教育の中

で、乗り入れ授業や合同行事などの一つの学校としての教育活動の実践を通して、義務教育学校の教師観や新たな学校文化を創る必要がある。開校1年目では地域との連携を図りつつ、小学校と中学校の相互の文化の融合を目指して、教師観や学校文化といった基礎部分を築き、2年目である昨年度は、全国へき地教育全国大会に向けて、3チーム（授業づくり、郷土学習、英語教育）で授業案を考え実践を行ったことで、授業観や教師観が揃ってきた。本年度は、三部会、各ステージ、3チームを効果的に機能させることで、研究主題により迫りたい。

小中一貫教育を推進する上で、各教科等の授業では学年間の系統的な指導、教科間における横断的な指導が求められる。旭学園では、全教科・領域等において、9年間の一貫カリキュラムを作成するとともに系統的な言語能力の育成を図る保・学園一貫表を作成し、令和4年度から試行し、令和5年度から全面実施した。その際、9年間を通じて、共通した授業観に基づいた授業づくりを進めることが求められた。そこで、思考力・判断力・表現力等を育成するため、「学びを深める4つの工夫」（※2）を取り入れた「主体的・対話的で深い学び」のある授業づくりを進めることで、9年間の一貫した授業観を形成した。これらを小中一貫教育を進める上での基盤となる取組として位置付けている。

（4）旭学園の教育の特色

①英語教育

本校の教育の特色の一つである「英語教育」は、旭学園の一つ目のミッション「グローバル社会・ソサイエティ 5.0 時代をたくましく生きる力」を育む中心的な教育活動となる。1年生から9年生までの英語教育で、異なる文化を持つ他者とつながるコミュニケーションスキル（自己表現、他者理解、英語4技能）の習得を図りたい。また、授業では、ネイティブスピーカーに触れる機会や積極的に英語でコミュニケーションを図る学習を通して、異なる文化を持つ他者とつながるコミュニケーションスキルの習得と自ら表現する意欲を育む英語教育を進めている。

②郷土学習

本校の教育のもう一つの特色である「郷土学習」は、旭学園の二つ目のミッション「ふるさと旭の発展を主体的に考え行動する力」を育む中心的な教育活動となる。主軸となる生活科・総合的な学習の時間では、9年間の系統性・連続性を持たせたカリキュラムを作成し、一つ一つの探究過程に応じた教育活動に取り組んでいる。また、地域との連携を積極的に取り入れながら、地域の発展・活性化につながるより効果的な「郷土学習」を目指している。

しかし、旭学園の教職員は、そのほとんどが他の市町村から勤務しており、旭地域の文化や産業・人材を詳しく知る者は多くない。そのため、教職員自身も郷土学習の実践を通して、児童生徒と一緒に楽しみながら学び、地域のよさや課題への理解をしていく必要がある。教職員が地域の現状や課題を追求する中で、地域の人々の努力やふるさと旭に対する思いを理解し進んで地域活動に参加したり、地域に貢献したりしようとする児童生徒を育てることが、郷土学習を進めていく上での、また、郷土への愛着をより深めていく上での追い風となると考えている。そして、後期ステージでは、地域の課題解決に向けて地域の活性化を提案するとともに、地域の課題解決に向けた貢献ができることを目標にしている。これらの学習を通して、「正解のない問いに立ち向かうこと」で探究しようとする意欲を高めるとともに「自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現する」という探究的な学び方を習得させたい。

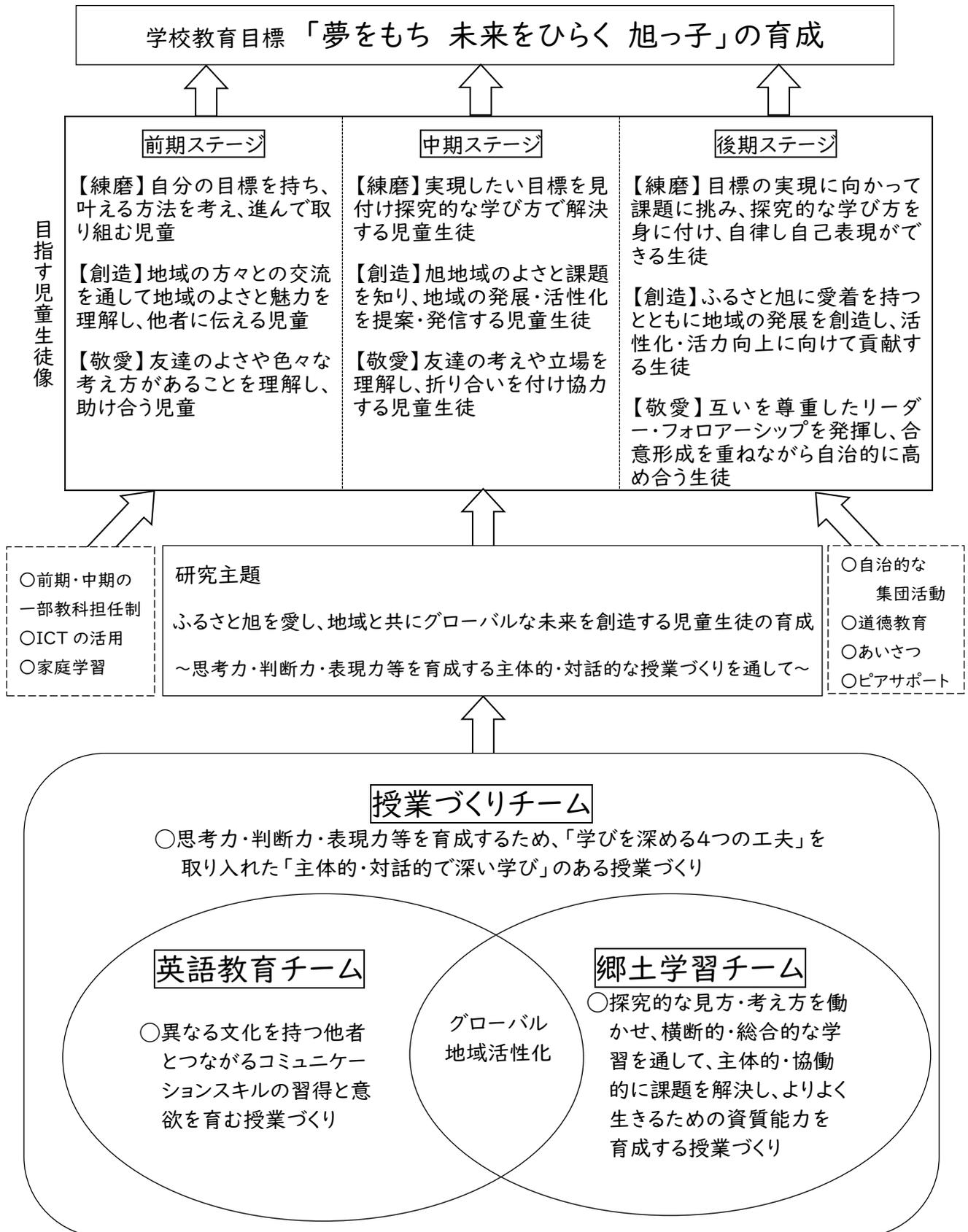
（※1）超高齢社会…高齢社会が進行し、65歳以上の高齢者の割合が「人口の21%」を超えた社会

（※2）学びを深める4つの工夫… ①見通しとめあて ②自分の考えの形成 ③考えを広げ深める対話
④学びの深まりを実感する振り返り

4 指導助言者

- 高旗 浩志 先生 (岡山大学教師教育開発センター 教授)
- 池上 真由美 先生 (吉備国際大学 外国語学部 特任教授)
- 柴田 和徳 先生 (津山教育事務所義務教育支援課)

5 研究構造図



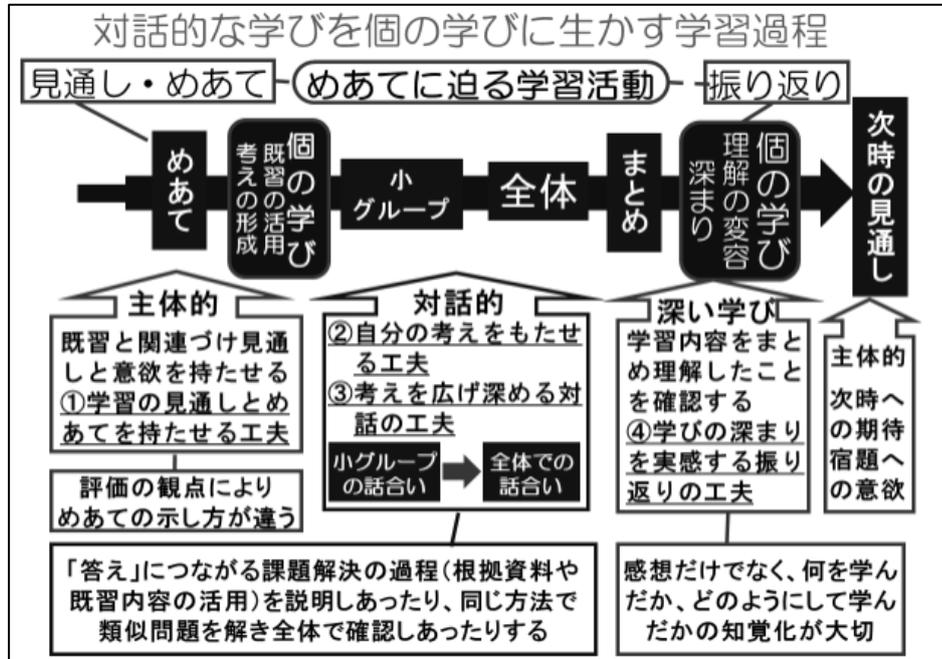
6 研究組織の内容及び進め方

原則、授業に携わる教員は以下の3つのうち、1つのチームに所属する

(1) 研究組織

① 授業づくりチーム

〈主な内容〉・思考力・判断力・表現力等を育成するため、「学びを深める4つの工夫」を取り入れた「主体的・対話的で深い学び」のある授業づくりを進める



・研究の重点として、単元・本時で付けたい資質・能力を明確にし、下記の「学びを深める4つの工夫」を取り入れる

学びを深める4つの工夫

①見通しとめあて

②自分の考えの形成

※下線部は R7重点

③考えを広げ深める対話

④学びの深まりを実感する振り返り

・保・学園一貫表「旭っ子の『身に付けたい力』」の思考力・判断力・表現力等の基盤となる言語活動(「話す・聞く」「書く」)を取り入れた授業づくりを進める

(R6) 話し方名人、話し合いの仕方、グループでの話し合いを实践

グループでの対話の機会を設けたことで、児童生徒の話し合い他者の考えを聞いて、言葉や態度で反応することはできている

(R7) 「問い返し」を行うことで、「考えを広げ、深める対話」を目指す

保学園一貫表(児童用)を活用し「話す・聞く」「話し合う」言語活動を児童が振り返る

※全教科・領域に関わるので、英語教育・郷土学習部会と合同で研究を行うこともある

② 英語教育チーム

〈主な内容〉・「R7旭保育園・旭学園英語教育一貫カリキュラム」に基づいた旭スタイルの授業づくりを進める

旭スタイル	① Greeting(あいさつ) 5分	(例)「Let's start English lesson.」 ALTとのやりとり(一問一答)
	② Warm up (ウォームアップ) 5分	フォニックス、歌、チャンツ、書く練習、小テスト Small Talk 等本時に関わる内容を各学年で決める
	③ Aim(めあて) 2分	本時のねらいを示す
	④ Activity(活動) 30分	本時のメインの活動。見通しを持って活動に入れるように、ALTと教師でデモンストレーションする
	⑤ Reflection (振り返り) 3分	英語の言語にまつわる気付きや、学習の到達度について、3年以上は振り返りシートに記入させる
	⑥ Closing(あいさつ)	例「Thank you for your lesson.」
	※パフォーマンステスト	学期に一度の目安で ALT や英語担当とのインタビューやポスター作り、スピーチなどのパフォーマンスを評価する

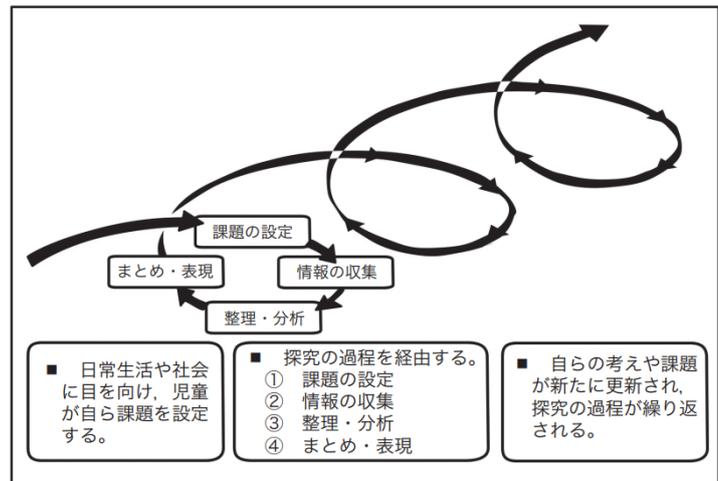
- ・異なる文化を持つ他者とつながるコミュニケーションスキルの習得と意欲を育む英語教育に取り組む（英語発表会「Let's Enjoy English」、英語圏の学校との交流）
 - ・作成した CAN-DO リスト（3～9年）を基にパフォーマンステストを実施し、5技能（話す（発表、やり取り）・聞く・読む・書く）を育成する
- (R6) 話したり聞いたり読んだりしたことのディクテーション活動を取り入れ、作文力の定着を図った
- (R7) 自己表現力（話す・書く）を向上させる授業実践、単元目標や Can-Do リストに沿った理解力・表現力が高まる活動（Small Talk、シャドーイング、ディクテーション、条件作文等）の充実を目指す

③郷土学習チーム

〈主な内容〉・「生活科・総合的な学習の時間」全体計画・年間指導計画に基づいた授業づくりを進める中で、探究的な学び方を習得する郷土学習を進めるために授業研究を進める

探究的な学習における児童の学習の姿

- 探究のプロセス**
- ①課題設定
 - ②情報収集
 - ③整理・分析
 - ④まとめ・表現
- ※下線部は R7 重点



〈文部科学省〉小学校学習指導要領（平成29年告示）解説
総合的な学習の時間編より

・地域の課題解決に向けて、自分たちが実行できることを考え提案することで、地域の活力向上、活性化を目指す

(R6) 全学年が実際に地域に出向き、思いや願いを聞くことができている

(R7) 今後も地域に出て実際の声を聞くことを大切にする

《整理・分析》で、児童生徒に視点を与えることで一人一人の考えを明らかにしたり、課題をより鮮明にしたり、新たな課題を見付けたりすることで、より課題解決に迫っていくことを目指す

(2) 研究の進め方

- ・年度当初に授業づくりチームより提案授業を行い、「4つの工夫を取り入れた授業」について確認する【R7年5月13日（火）】
- ・2学期中に公開授業研究会を行う。公開授業は、授業づくりチーム、郷土学習チームより各1本とする。なお、この授業は一人1公開に兼ねる。【R7年11月14日（金）⑤】
- ・英語教育チームの公開授業は別日に英語担当、小課程教員で行う【R7年9月26日（金）⑤】
- ・日々の授業研究は、各チームに所属する教職員が1人1回、授業を公開することで行う。その際は、各チームで3人程度のグループを作り、そのメンバーで指導案検討及び授業反省を行う。
- ・代表授業以外の授業研究は、各チーム内での研究・研修とするが、全体にも日程を知らせ、参観、授業反省への参加ができるようにする。

7 研究・研修計画（外部講師招聘の研修予定のみ記載） ※R7年3月末現在

5月	13日	（火）	授業づくり代表授業	講師：高旗浩志先生
7月	29日	（火）	指導案検討・講義（英語）	講師：池上真由美先生
9月	26日	（金）	英語教育代表授業・指導講評	講師：池上真由美先生
10月	2日	（木）	初任者研修会場校（【中】国・数・音）	講師：総合教育センター
11月	14日	（金）	公開授業研究会（授業・郷土）	講師：高旗浩志先生、柴田和徳先生